

轟尾横穴墓群

福岡県田川市轟尾所在横穴墓群の調査

田川市文化財調査報告書

第 5 集

1989

田川市教育委員会

とどろ お
轟 尾 横 穴 墓 群

1989

田川市教育委員会

序

この報告書は、田川市大字伊田1969番地の1に所在した轟尾横穴墓群の発掘調査の記録です。
ここは、筑豊地域においても大横穴墓群として知られている経塚横穴墓群に隣接している所
であります。

この報告書が古代史研究の一資料として大いに活用され、文化の向上に役立つとともに、市
民の文化財に対する理解をよりいっそう高める一助になれば幸いです。

この横穴墓群より出土した遺物は、本市石炭資料館に保存し、市民に公開していきたいと考
えております。

この調査にあたり、ご尽力いただきました関係者各位のご理解とご協力に対し、深く感謝の
意を表します。

平成元年3月31日

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

例 言

1. 本報告書は、福岡県田川市大字伊田1969番地の1に所在した^{とどろみ}轟尾横穴墓群の緊急発掘調査の記録である。
2. 調査は土取り工事に伴い、田川市教育委員会が主体となり、国・県の補助を受けて実施した。
3. 出土人骨の取り上げ及び鑑定は、別府大学文学部坂田邦洋助教授に依頼した。
4. 遺構の実測は上野、花村が行った。遺構写真は上野が撮影し、空中写真は「PHOTO オオツカ」に委託した。
5. 遺物写真は、飯塚市歴史資料館にて鳴田光一氏の指導のもとに上野が撮影した。遺物の実測及び製図は上野が行った。なお、人骨の写真は坂田氏撮影のものを使用した。
6. 本書の執筆は、Ⅳを坂田邦洋氏にお願いし、他は上野が行った。
7. 本書の編集は、上野が行った。

本文目次

Ⅰ. 調査の経過	1
Ⅱ. 位置と環境	3
Ⅲ. 調査の内容	6
1. はじめに	6
2. 遺 構	6
3. 遺 物	17
(1) 装 身 具	17
(2) 鉄 器	18
(3) 土 器	21
(4) 弥生土器・石器	23
Ⅳ. 出土人骨について	31
Ⅴ. おわりに	38

図 版 目 次

- 図版1 1. 横穴墓群遠景(鎮西小学校より) 2. 横穴墓群近景(北西より)
3. 横穴墓群全景(気取より)
- 図版2 1. A群全景 2. A-1号 3. A 4号閉塞状態 4. B-1号
- 図版3 1, 2. B-2号遺物・人骨出土状態 3. B-2号奥壁 4. C群全景
- 図版4 1. C-1号 2. C-2号 3. C-2号工具痕 4. D群全景
- 図版5 1. D 2号人骨出土状態 2. E群全景 3. E-1号人骨出土状態
4. E-1号工具痕
- 図版6 1. E-2号人骨出土状態 2. E群前庭部遺物出土状態
3. F-1号 4. F 1号鉄刀出土状態
- 図版7 1. 耳環 2. 鉄斧 3. 貝輪 4. 鉄刀
- 図版8 銅、鉛金具、鉄線、刀子
- 図版9 土 器 1
- 図版10 土 器 2
- 図版11 土 器 3
- 図版12 損傷のある骨 1. 内側 2. 外側

挿 図 目 次

第1図	周辺道路分布図 (1/50,000)	2
第2図	周辺地形図 (1/2,500)	4
第3図	遺構配置図 (1/200)	5
第4図	A-1, 2, 3号実測図 (1/60)	7
第5図	A-4, 5号実測図 (1/60)	8
第6図	B 1, 2号実測図 (1/60)	10
第7図	C-1号実測図 (1/60)	11
第8図	C-2, 3, 4号実測図 (1/60)	12
第9図	D-1, 2号及び土層実測図 (1/60)	14
第10図	E-1, 2号実測図 (1/60)	15

第11図	F-1号実測図(1/60)	16
第12図	装身具実測図(1/2)	18
第13図	鉄器実測図(1/2)	19
第14図	鉄刀実測図(1/6)	20
第15図	弥生土器(1/4)、石器(1/2)実測図	23
第16図	土器実測図1(1/3)	24
第17図	土器実測図2(1/3)	25
第18図	土器実測図3(1/3)	26
第19図	土器実測図4(1/3)	27
第20図	B-2号遺物・人骨出土状態(1/30)	28
第21図	D-2号、E-1,2号遺物・人骨出土状態(1/30)	29
第22図	E.群前庭部及びF-1号遺物・人骨出土状態(1/30)	30
第23図	埋葬姿勢(略図)	32
第24図	損傷の見られる骨の部位(後頭部)(1/3)	35
第25図	骨損傷(1/1)	36

表 目 次

第1表	耳環計測値一覧表	17
第2表	土器観察表	21
第3表	人骨一覧表	31
第4表	歯 式	34
第5表	下顎骨計測値	34
第6表	上腕骨計測値	34
第7表	大腿骨計測値	34
第8表	脛骨計測値	34

I. 調査の経過

昭和62年9月、県文化財保護指導委員の水上薩摩氏より、経塚横穴墓群と相対する丘陵で土取りが行なわれているという連絡が市教育委員会に入った。早速、現地踏査を行なったところ、丘陵上に円墳1基、土取りの行なわれている北側斜面で5基の横穴墓を確認した。また南側斜面にも多くの横穴が存在することが判明した。

直ちに、市教育委員会は土地所有者と協議を行い、当該部分の土取りを発掘調査が終るまで中止して頂く事の合意を得た。

発掘調査は田川市教育委員会が事業主体となり、国及び県の補助を受け実施した。昭和63年6月7日より地形測量を開始、バックフォーによる表土除去後、遺構の調査に入った。すべての現地調査を終了したのは8月5日であった。

調査関係者は下記のとおりである。

総括・庶務	田川市教育委員会	教育長	角 銅 國
	同	文化体育課長	西 村 勝
	同	同 係長	平 賢 一
	同	同 主任	橋 岡 佑 子
	同	学芸員	森 本 弘 行
調査担当	田川市教育委員会	嘱 託	上 野 智 裕
調査補助員	同	同	花 村 究

なお、調査にあたっては、別府大学文学部坂田邦洋助教授、九州歴史資料館森田勉氏、筑豊教育事務所新原正典氏に、指導、助言を頂いた。また、山本建設の山本正氏には終始何かと御世話になった。このほか、実習生の有馬美奈子嬢、本田美由紀嬢(梅光女学院短期大学)の協力を得た。さらに、調査期間中、福岡県文化財保護指導委員水上薩摩氏の来援があった。記して感謝の意を表します。最後に、連日発掘調査に携って頂いた作業員の皆様にも謝意を表します。

発掘作業員

石津民雄、石津太、上田政子、大下常利、小野宮子、木本秀樹、品川吉弘
千住寅一、高橋渡、中村陽典、奈木野満里子、藤井カヨ子、山崎選子



- | | | | | |
|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 若八幡横穴墓群 | 7. セスドノ古墳 | 13. 田中横穴墓群 | 19. 豊田山横穴墓群 | 25. 波ノ越横穴墓群 |
| 2. 上宮田横穴墓群 | 8. 佐々古墳 | 14. 六角堂横穴墓群 | 20. 福寿山横穴墓群 | 26. 明神山横穴墓群 |
| 3. 法光寺裏横穴墓群 | 9. 大正輪神社横穴墓群 | 15. 岡山横穴墓群 | 21. 大行寺横穴墓群Ⅰ | 27. 柳瀬山横穴墓群 |
| 4. 長瀬横穴墓群 | 10. 森尾横穴墓群 | 16. 狐塚横穴墓群 | 22. 大行寺横穴墓群Ⅱ | 28. 上伊田横穴墓群 |
| 5. 釜ヶ丘横穴墓群 | 11. 経塚横穴墓群 | 17. 坂永横穴墓群 | 23. 梅原横穴墓群 | 29. 高嶋横穴墓群 |
| 6. 中津原横穴墓群 | 12. 若島八幡横穴墓群 | 18. 丸山横穴墓群 | 24. 野原山横穴墓群 | 30. 伊田原横穴墓群 |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

Ⅱ．位置と環境

轟尾横穴墓群は、田川市大字伊田1969番地の1(轟尾)に所在する。

北を除く三方を山々に囲まれた南北に長い田川盆地は、金国山を境に西隣する嘉穂盆地とともに遠賀川上流域に位置する。地質的には東側山塊は花崗岩が主体をなし、西側山塊は変成岩、堆積岩、花崗岩などの岩石から成っている。この東西山塊に挟まれた盆地底には、古第三紀層から成る二つの低丘陵が南南東から北北西に延びている。この砂礫層から成る低丘陵の周縁部は、東を流れる彦山川、西を流れる中元寺川及びその支流の浸蝕により樹枝状に入り組んでいる。この低丘陵には、多くの横穴墓群や古墳など、様々な遺跡が集中している。

轟尾横穴墓群は、彦山川左岸の標高55m程の丘陵北側斜面の砂岩層に穿れていた。100基以上の横穴墓が群集する経塚横穴墓群^{註1}とは小さな谷を介して向い合っている。ここから田川郡大任町大行寺付近までの丘陵には、ほぼ連続して横穴墓群が所在している。また轟尾横穴墓群より北西約2km(彦山川右岸)には100基以上から成る堂ヶ丘横穴墓群が所在していたが、十分な調査が行なわれないまま宅地造成により消滅した。13号からは、鉄地銀張りの甕が出土したと言われている。^{註2}

中元寺川流域に於いては、狐ヶ迫横穴墓群や法光寺裏横穴墓群など、わずかに数例しか確認されておらず、彦山川流域とは対照的である。今後の調査が俟たれる。

これまでに本格的な調査が実施されたものとしては、田川市弓削田の狐ヶ迫横穴墓群、夏古の清瀬横穴墓群、伊田の伊田狐塚横穴墓群、大任町の狐塚古墳群、大行寺横穴墓群^{註3}などがある。

また、丘陵上には数多くの古墳群が散在している。その中でも夏古古墳群は大規模で広範囲に渡って分布している。1号墳は石槨を持ち、三果環刀柄頭が出土した21号墳は巨石古墳で、石室全長は約12.5mを測る。^{註4}

しかし、消滅したもの、未確認のものも多々あると考えられ、遺跡の実態把握と保護は今後の課題である。

註1 小方泰宏・長谷川信之「田川地域横穴墓基礎調査報告その1」『地域相研究』4号 1978

註2 『田川市史』上巻 田川市史編纂委員会 1974

註3 『狐ヶ迫横穴群』『田川市文化財調査報告書』第1編 田川市教育委員会 1981

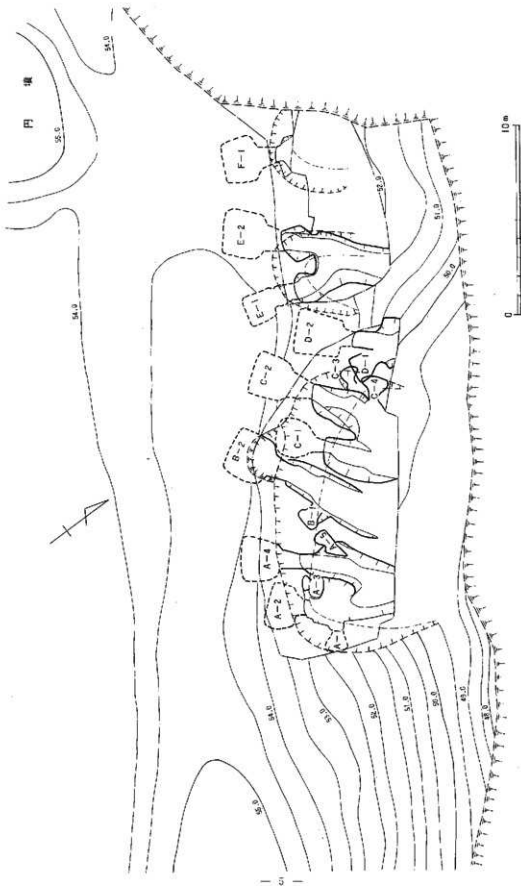
註4 『夏古古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群』『田川市文化財調査報告書』第2編 田川市教育委員会 1983

註5 『狐塚古墳群』『大任町文化財調査報告書』第1編 大任町教育委員会 1970

『狐塚古墳群Ⅱ』『大任町文化財調査報告書』第2編 大任町教育委員会 1978

註6 『大行寺横穴群』『大任町文化財調査報告書』第3編 大任町教育委員会 1979

註7 小方泰宏「夏古古墳群の歴史的位階」『第七田川』第30号 1987



第3圖 遺構配置圖 (1/200)

Ⅲ.調査の内容

1. はじめに

轟尾横穴墓群は、彦山川左岸の標高55m程の丘陵北側斜面に位置する。調査時には丘陵西端部及び北側斜面先端部はすでに削り取られていた。現状で5基の横穴墓を確認した。

横穴墓は、標高53.5m～49.5m間の丘陵法面をカットし平坦面を造り、そこから削り込まれていた。この様なカット面は三ヶ所で見られた。調査の結果、東側で13基、中央で2基、西側で1基を確認した。横穴墓は西から東へ傾斜する砂岩層に穿たれており、その上下は砂礫層等の軟質層で、砂岩層東側は硬質な岩盤が露出していた。すでに削り取られていた西側では砂岩層は薄く、東側同様、横穴墓は作られていなかったと思われる。

また、丘陵上西端部付近には横穴式石室を主体部とする円墳及び、丘陵南側斜面に於いても多くの横穴が存在することが確認された。

横穴墓の多くは盗掘を受けていた。遺物は主にB-2号及びE群前庭部から出土し、また7基より計13体の人骨が検出された。

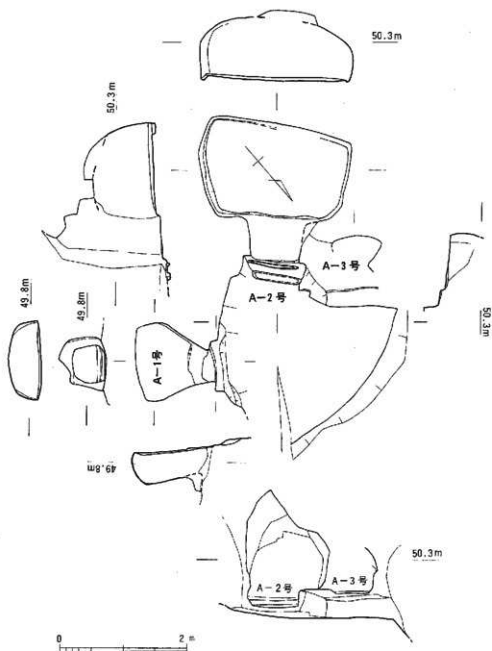
2. 遺 構

今回の発掘で合計16基を調査したが、安全対策上、墓道は十分に調査できなかった。横穴墓は、墓道、床面レベル等によりA群～F群に分けた。

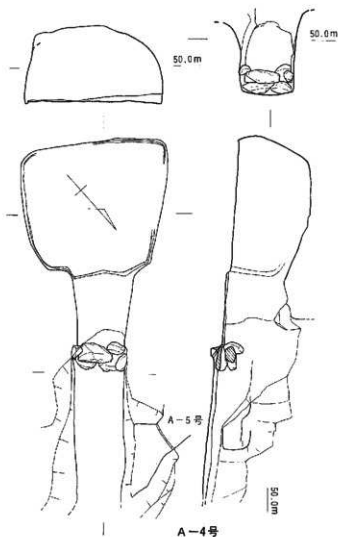
A群は、大小合わせて5基からなる。1号のみが主軸方向を異にする。玄室床面は標高約49.5mに位置する。北東方向に傾斜する墓道は2本に分岐し、それぞれ2号、4号へと続く。遺物としては、須恵器、土師器片及び耳環2個が出土した。しかし量は少なく、焼成不良のものが比較的多く含まれていた。

1 号 (第4図、図版2-1・2)

遺存度の良いもので、主軸方向はN-46°-Wをとる。羨門には閉塞のためと思われる掘り込みが見られる。羨道、玄室の区分は不明瞭だが、玄室床面はやや高くなっており、入口方向にやや傾斜していた。平面形は巾着状で、全長1.24m、羨門幅0.5m、玄室最大幅1.26m、高さ0.5mを測る。立面形はアーチ状である。室内覆土より川原石が数点検出された。副葬品等は出土しなかった。



第4图 A-1,2,3号实测图 (1/60)

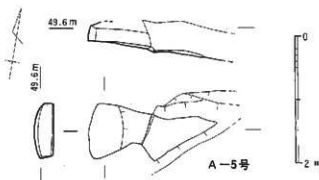


2号 (第4図, 図版2-1)

調査前より存在が確認されていたもので、羨道及び玄室の一部は大きく崩壊していた。主軸方向はN-42°-Eをとる。羨道と玄室は段により区分できる。羨門前には二条の溝状の掘り込みが見られる。羨道は長さ0.6m、幅0.8m~0.9m程で、玄室方向にやや開く。両袖は明瞭である。床面はゆるやかに入口側に傾斜しており、壁際には、幅6cm程の浅い溝が通っていた。平面形は横長長方形で、長さ1.44m、最大幅2.4m、高さ約1mを測る。立面形はアーチ状である。玄室内覆土より耳環片が出土した。

3号 (第4図, 図版2-1)

2号に隣接する小型横穴で、2号床面より約40cm上方に掘り込まれていた。著しく崩壊している。平面形は巾着状で、長さ0.5m、幅0.8m程と思われる。出土遺物は検出されなかった。



第5図 A-4,5号実測図 (1/60)

4 号 (第5図, 図版2-1・3)

調査前にすでに一部開口していた。主軸方向はN-41°-Eをとる。羨門は崩壊気味だが、一部掘り込みが見られる。羨門前には長さ70cm、幅14cm、深さ6cm程の溝状の掘り込みがあり、その上には枕状の砂岩六個が二段に積まれていた。玄室方向に開く羨道は長さ1.2m、幅0.7m~1.0mの細長で、一段高い玄室へと続く。右袖は退化気味である。玄室床面は入口に向い傾斜し、壁際には幅4cm程の浅い溝が一部止絶えながら通る。天井は比較的残りが良く高さ1.14mを測る。平面形は羽子板状で、長さ2.06m、最大幅2.28mを測る。立面形はドームに近いアーチ型をなす。壁面には一部幅7cm、長さ8cm程の工具痕が残っていた。覆土中より人骨片及び、焼成不良の大甕片が出土した。

5 号 (第5図, 図版2-1)

4号へ向う墓道右側に掘り込まれた小型横穴で、調査中に崩壊した。主軸方向はN-80°-Eをとる。玄室床面は一段高くなっており、入口方向にゆるやかに傾斜していた。平面形は巾着状で、全長0.9m、羨門幅0.5m、玄室最大幅0.94m、高さ約0.4m程である。立面形はアーチ型で出土遺物は検出されなかった。

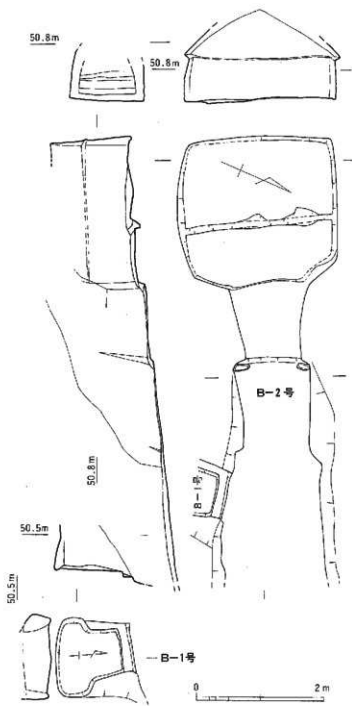
B群は2基からなる。床面は標高約50mに位置する。2号はやや奥まった所に掘り込まれており、作りはE-1号同様「室」なもので、追葬が明確に行なわれていた。墓道は長さ約5.5m、幅1.5m程で、北東方向にゆるく傾斜し延びていた。墓道からの出土遺物は少なく、若干の土師器及び弥生土器片が出土した。

1 号 (第6図, 図版2-4)

調査前より存在が知られていたもので、2号へ向う墓道左側に掘り込まれていた。天井は崩落している。主軸方向はN-88°-Eをとる。床面は羨道、玄室の区分はなく、壁際には幅6cm前後の浅い溝が廻り入口へ向う。玄室平面形は横長隅丸長方形で、全長1.04m、羨門幅0.7m、玄室幅1.24mを測る。遺物は羨門前より須恵器片2点が出土した。

2 号 (第6・20図, 図版3-1・2・3)

調査以前より大きく陥没しており、室内は大小砂岩塊等で埋まっていた。調査の結果、盗掘等を受けていないことが判った。主軸方向はN-66°-Eをとる。羨道、玄室は段により区分される。羨門前には80cm×60cm、厚さ30cm程の砂岩の一枚石と枕状石が倒れていた。羨道は長さ1.2m、幅0.8m~1.2m程で玄室側に開く。ほぼ対象の面袖は内傾していた。玄室壁際には幅6cm前後の浅い溝がほぼ全周していた。床面は中心よりやや入口寄りを横断する溝により二分され、奥側はやや高くなっていた。平面形は正方形に近く長さ2.3m、幅2.5m程である。家形をなす奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。側壁は崩壊著しいが、天井との境に軒を示す溝が通っていた。立面形は家形で、高さは1.2m程と思われる。奥壁側及び下段より人骨が検出された。副葬品と



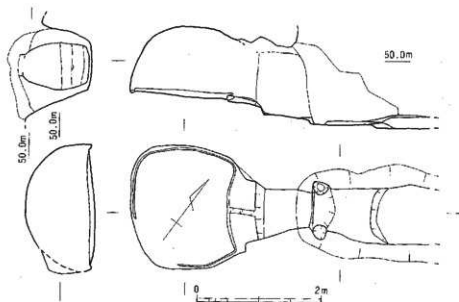
第6図 B-1,2号実測図 (1/60)

しては須恵器、耳環、貝輪、鉄斧、刀子、銅金只、鋳、また閉塞石下より鋳、鉄鏃が出土した。人骨及び土器の型式より追葬は明確である。その他玄室、炭道覆土中より甕片が数点出土しており、同じ破片はA、C群墓道でも出土している。

C群は大小合わせて4基からなる。1、2号床面は標高約49.1mに位置する。B群より約1m下より掘り込まれている。特に1号はB-2号とC-2号の間に位置している。墓道は1号と2号とに分れるが途中で合流し一本となる。墓道覆土より杯身、壺、甕の破片、土師器片及び弥生土器片が出土したが、量は少ない。破片の中にはA、B、D、E群墓道覆土出土と同一個体片(大甕)が含まれている。

1号(第7図、
図版3-4、4-1)

主軸方向はN-54°-Eをとる。崩壊瓦珠の羨門前には浅い溝状の凹みが



第7図 C-1号実測図 (1/60)

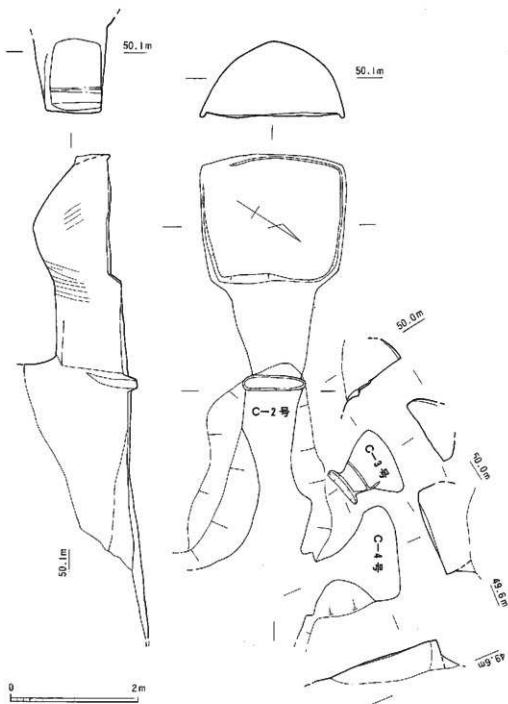
見られる。羨道は幅狭で長さ1.0m、幅0.6m~1.0mで、玄室側に小さく開く。両袖は短かく退化している。玄室床面は入口側に傾斜し、壁際には一部止絶えるが溝が廻り羨道へ向う。平面形は扇張りの方形状で、長さ1.84m、幅2.0m程である。天井は残り良く高さ1.14mを測る。立面形はドーム型をなす。壁面には幅8cm~9cm程の工具痕が一部が見られる。遺物は室内覆土より耳環、人骨片が出土した。

2号 (第9図、図版3-4、4-2・3)

調査前より大きく開口しており、奥壁には落書きが見られた。主軸方向はN-56°Eをとる。羨門はやや崩れ気味だが、閉塞のためと思われる掘り込みがある。羨門前には長さ1.0m、幅0.22m、深さ0.3m程の溝状掘り込みが見られる。羨道は長く玄室に向かって広がる。長さ1.5m、幅0.8m~1.4m、高さ1.4mを測り、玄室とは明確な段により区分される。両袖は内傾し退化しつつある。玄室床面は平坦に近く、壁際には明瞭な溝を廻らす。平面形は奥に開く方形状で、長さ2.0m、最大幅2.3mを測る。山形の天井は残り良く高さは1.2m程である。立面形はドーム状である。壁面には幅9cm~11cm程の工具痕が明瞭に残る。玄室からの出土遺物はなく、羨道覆土より上師器の高杯片が出土した。

3号 (第8図、図版3-4)

2、4号間に位置する小型横穴で、2号に向う右側、墓道より70cm程度上に掘り込まれている。主軸方向はN-67°Wをとる。羨門付近は溝状に凹んでいる。玄室床面はやや高まっていた。



第8图 C-2,3,4号实测图 (1/60)

平面形は巾着形で、全長0.86m、幅0.44m～1.1m、高さは推定で0.5m程である。立面形はアーチ型をなす。遺物は検出されなかった。

4 号 (第8図, 図版3-4)

調査中に著しく崩落した。一部D 1号と重なる。主軸方向はN-49°Eをとる。羨道、玄室の区分は不明瞭である。全長1.3m、幅は入口で0.4m、奥壁で1.5mを測る。遺物は検出されなかった。

D群は2基よりなる。床面は標高約48.7mの位置にあり、C群より40cm下から掘り込まれている。他より手前から掘り込まれてるため墓道はほとんど調査できなかった。床面は赤黄色の砂礫層に達していた。墓道は深く1.5mを測る。墓道覆土より土師器片、須恵器杯身や甕片などが出土した。

1 号 (第9図, 図版4-4)

調査中に崩壊した。主軸方向はN-10°Eをとる。他群と異なり床面は赤黄色の砂礫層に達していた。羨道と玄室の区分は不明瞭である。玄室平面形は巾着形で、長さ1.1m、最大幅1.5mで高さは0.6m程であったと思われる。遺物は検出されなかった。

2 号 (第9・21図, 図版4-4, 5-1)

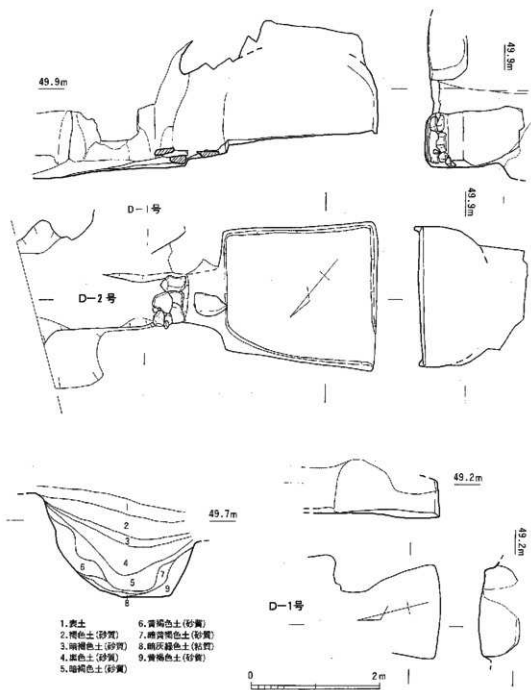
1号の羨門右側に隣接する。羨門上方には、85cm×60cm程の砂岩塊と枕状石の二石が下にずれ落ちかけた状態で検出された。閉塞石の一部と考えられる。羨門は著しく崩壊していた。主軸方向はN-51°Eをとる。羨門前には砂岩の平石が二段に積み、羨道と玄室の間には平石が一枚敷かれていた。羨道は長さ0.5m、幅0.76m～1.1mを測り、玄室に向って開く。玄室は羨道に対して右側に偏る。玄室は大きく、床面は入口方向へ大きく傾き、壁際には幅4cm、深さ10cm程の明瞭な溝が廻る。平面形は羽子板状で、長さ2.5m、最大幅2.34mを測る。天井及び壁面は崩落が著しい。立面形はアーチ型をなす。奥壁寄りの所から人骨が集められた様な状態で検出された。副葬品は検出されなかった。

A群～D群は、同じカット面に掘り込まれていたが、E群、F群は他の4群とは異なり、一群をなすと考えられる。

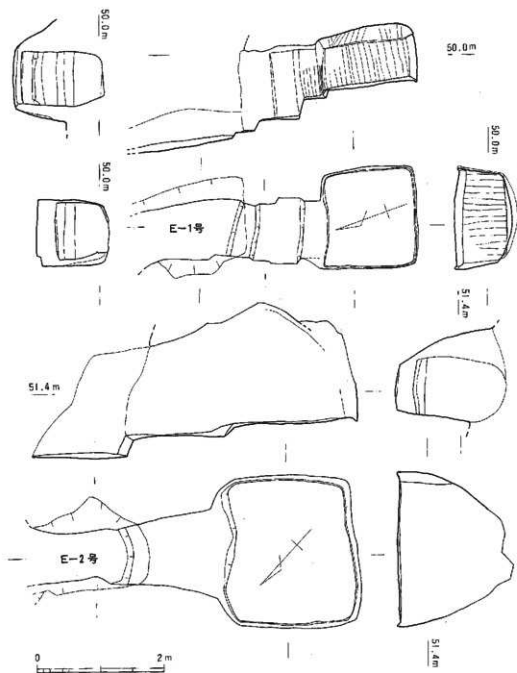
E群は2基からなる。墓道は試掘の際、削平しすぎた感がある。1号墓道は右曲し羨道へ向う。墓道は長さ2.0m、幅1.0m程で、前庭部へ続く。前庭部より須恵器、土師器、鉄鍬がまともに出土した。

1 号 (第10・21図, 図版5-2・3・4)

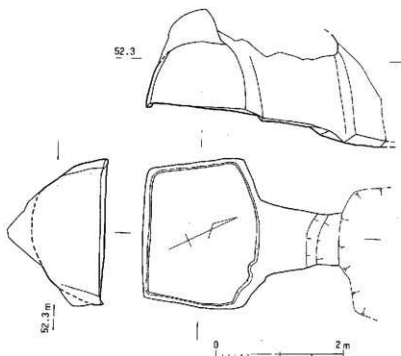
複室構造で作りの丁寧な横穴墓である。主軸方向はN-20°Eをとる。調査の結果、盗掘等を受けていないことが判った。閉塞は平石三枚を縦長に並べ、その下には枕状石が置かれていた。



第9図 D-1,2号及び土層実測図 (1/60)



第10圖 E-1,2号実測図 (1/60)



第11図 F-1号実測図(1/60)

羨門は崩れ気味だが台形状を呈していた。前室への羨道は短く長さ0.3m、幅0.8m程である。前室は長さ0.6m、幅0.9m～1.04m、高さ1.0m程で、後室へやや広がっていた。後室へ向う通路と前室との境は高さ0.3mの段で区分される。後室へ向う通路は長さ0.24m、幅0.9m、高さ0.8m程で、作りは丁寧で、工具痕が見られ、後室とは段で区分される。後室は羨道に対して右偏する。袖の作りは丁寧で、角柱状をなす。後室床面は羨道側に大きく傾き、壁際には幅2cm前後、深さ6cm程の溝が廻る。前室への羨門と後室奥壁床面との高差は約0.9mを測る。側壁、天井は一部崩壊しているが、幅7cm～9cmの工具痕が明瞭に残る。左右壁の工具痕は、左側が一定幅なのに対し、右側は雑で複雑に切り合っていた。壁と天井との境には軒が作り出されており全周する。立面形は明確なアーチ型をなす。後室内には保存状態の良い人骨4体分が検出された。遺物としては頭骨付近より耳環3個が検出された。

2号 (第10・21区、図版5-2、6-1)

F-1号同様、試掘の際発見されたもので、主軸方向はN-49°Eをとる。羨門前は、墓道両側上端を平坦にならしめてあった。この付近から試掘の際に扁平で厚みのある巨石が掘り出されており、ややずれ気味で検出された長方形の石とともに平坦面に天井石として架構されて

いたものと思われる。羨門は崩壊著しい。羨道は長さ1.5m、幅0.9m～1.4m程で、玄室側に八字に開く。玄室床面は入口に向い傾いており、壁際には幅10cm、深さ6cm前後の溝が廻る。平面形は正方形に近く、辺1.3m～1.36mを測る。側壁及び天井は著しく崩落していた。立面形はアーチ型と思われる。奥壁寄りに人骨が散乱していた。遺物としては高杯が二つに割れた状態で転がっていた。

F-1号 (第11・22図、図版6-3・4)

試掘の際、羨門前は大きく削平された。主軸方向はN-26° Eをとる。羨門は著しく崩壊している。羨道は長さ0.6m、幅0.9m～1.2mを測る。玄室は一段高くなっている。床面は入口へ傾斜し、壁際には幅8cm、深さ4cm前後の溝が廻る。平面形は奥壁側にすばまる台形状をなし、長さ1.8m、最大幅2.3mを測る。天井は著しく崩落している。立面形はアーチ状である。床面では三ヶ所で人骨が検出された。遺物としては、玄室入口より鉄刀が斜め向きに、鏝の下より鉄鏝の某部が検出された。

3. 遺 物

(1) 装 身 具

耳 環 (第12図、

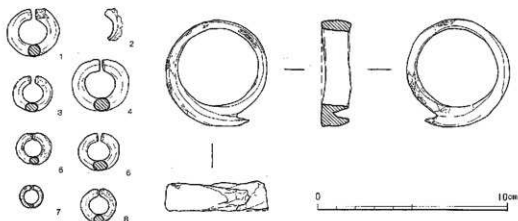
図版7-1、第1表)

4基の玄室内から6個、羨道1個、前庭部1個の計8個が出土した。そのうちB-2号、E-1号出土品は人骨近くより検出されており、装着されていたものと思われる。またE-2号天井石付近の須恵器内より検出されたものは、祭祀に

作うものとも考えられる。耳環は銅地で、金、銀、金銅張りがある。最大幅29.5mm、最小幅12.5mmを測る。全体的に遺存状態は良い。計測値等は第1表の通りである。

出 土 地 点	径 (mm)		材 質	押印番号	備 考
	最大径 (mm)	最小径 (mm)			
A群 羨 道	27.0	6.5	銅地銀張り	第12図-1	銀の残りが良好
A-2号 玄室内			銅地銀張り	第12図-2	破片 (3/4欠損)
B-2号 玄室内	20.5	6.5	銅地銀張り	第12図-3	銀の残りが良好、両有り
C-1号 玄室内	29.5	8.0	銅地金銅張り	第12図-4	
E-1号 玄室内	18.5	4.5	銅地銀張り	第12図-5	出土状態良好有り、1
E-1号 玄室内	18.5	5.0	銅地銀張り	第12図-6	出土状態良好有り、2
E-1号 玄室内	12.5	2.0	銅地金張り	第12図-7	
E-2号 須恵器内出土品	21.5	7.0	銅地金張り	第12図-8	金の残りが良好有り

第1表 耳環計測値一覧表



第12図 装身具実測図 (1/2)

貝輪 (第12図, 図版7-3)

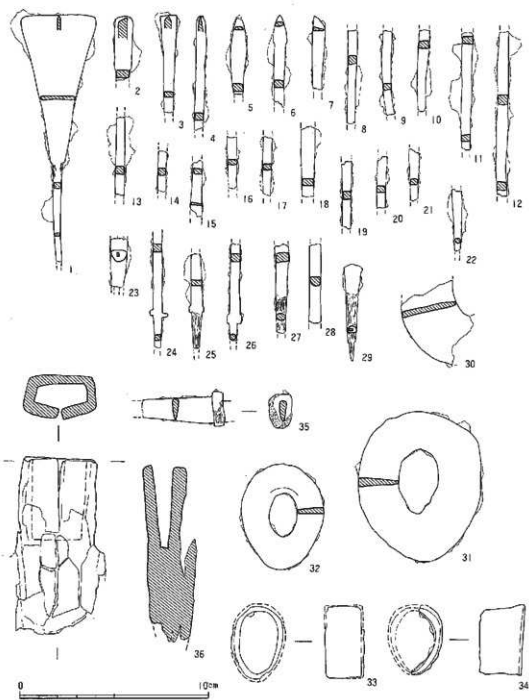
B-2号出土でイモガイを輪切りにしたものである。覆土に混じって検出されたため、装着していたのかどうかは不明である。ほぼ完形で外径56mm×53mm、内径41mm×42mm、高さ12mm～15mmを測る。表面は剥離のため荒れており、茶白色を呈している。田川地方では田川市狐ヶ追7号横穴墓より2個体分、大任町の狐塚I-1b横穴墓より1個体分が出土している。いずれも横穴墓群の中でも大きく、作りの丁寧なものから出土している。この時期もひきつづいて南方との交流が行なわれていたものと考えられる。

(2) 鉄器

鉄器は、B-2号玄室内と間塞石下、E群前庭部及びF-1号玄室内より計37点出土した。E群前庭出土の鉄鏃に全て折損しており、同一個体も含まれているものと思われる。

鉄鏃 (第13図1～29, 図版8)

1はB-2号間塞石下より出土したほぼ完形品で、方頭広根斧箭式に属するものである。現存長12.9cm、刃部幅4.0cmを測る。茎部には一部木質が錆着している。2～26はE群前庭部より一括して出土した。全て折損しており、錆が著しい。細根鏃で2は円頭斧箭式、3は方頭斧箭式、4は柳葉式、5は片丸造り柳葉式、6は両丸造り長三角形式、7は片刀式に属する。8～22は軸の部分と思われる。23～26は茎から軸の部分である。25は莖被に木質が付着していた。27～29はF-1号の鉄刀の鋸下より検出された茎部である。29は木質の遺存が良く広根鏃の茎部と思われる。



第13圖 鉄器実測図 (1/2)

鐔 (第13図30~32, 図版8)

30はB-2号玄室内より出土した破片で、厚さ2mm~3mmである。
31はF-1号出土鉄刀の鐔である。長円形を呈し、外縁は長径79mm、短径65mm、内縁は長径34mm、短径22mm、厚さ2mm~3mmで内側が薄く作られている。32はB-2号の閉塞石下より出土した。長円形を呈し、外縁は長径53.5mm、短径43mm、内縁は長径22.5mm、短径14mm、厚さ2mm~3mmを測る。内縁付近に鞘金具が接合していた痕跡が見られる。

鞘金具 (第13図33・34, 図版8)

33はB-2号玄室より出土した。長さ21mmで長径38mm、短径25mmを測る。内側には木質が付着している。34はF-1号出土鉄刀に伴うもので半分欠く。長さ22mm、長径35mm、短径26mm程と思われる。内側には木質が付着している。

刀子 (第13図35, 図版8)

35はB-2号玄室より出土したもので、刃部を折損する。現存長44mm、茎幅18.5mm、茎厚12mm程を測る。茎部には木質が付着している。

鉄斧 (第13図36, 図版7-2)

36はB-2号玄室内の平瓶(第20図-23)中より発見された有肩式である。鉄斧は肩部及び刃部端を欠く。現存長93mm、復原刃部幅52mm、刃部厚約15mm、袋部長43mm、袋基部内法長は25mm×10mm程である。

鉄刀 (第14図, 図版7-4)

F-1号出土の直刀で、鐔、鞘金具(第13図31・34)を伴う。片間で身を一部欠く。全長^{81.5}~~80.5~~cm、刃部長^{76.9}~~75.4~~cm、身幅3.4cm、身厚0.65cm~0.7cm、茎長11.3cm、茎幅1.6cm~2.0cm、茎厚0.5cm程である。目釘穴は開寄りに1個開けられている。



第14図 鉄刀実測図 (1/6)

(3) 土 器

今回の調査で、須恵器約90個体分、土師器15個体分程が出土した。土師器は高杯、浅鉢、埴、甌、杯身などがあるが、小破片のため原形の不明なものが多い。須恵器には杯身、杯蓋、高杯、平瓶、提瓶、甌、埴、脚付長頸壺、甕と多種類のものが見られる。横穴墓は盗掘を受けたものが多く、また墓道は安全対策上、十分調査できなかったため、比較的出土量は少なく、主にB-1号及びE群前庭部より出土した。

第2表 土器観察表

(①口縁 ②器底 ③夾け部最大径 ④立上り高 ⑤胴幅 ⑥胴部最大径)

番号	器 種	出土位置	出土地	法 量	観察及び特徴	色調	焼成	備 考
1	杯 身	第15区 図版9	A群墓道	①13.30×4.0 ②11.94×0.8	器底は薄灰陶質。口部内面はへう張り、内面は一部不安定なナズ。他はナズを施す。砂粒を多く含む。	灰黄色	やや不良	
2	杯 身	第15区 図版9	A群墓道	①9.82×4.8	胴部に1本の灰線を描く。器底は薄灰陶質。砂粒を多く含む。	内灰色	不良	
3	杯 身	第15区 図版9	夾鉢	①13.10×4.5	外面は薄灰。内面はナズを施す。砂粒を多く含む。	灰黄色	不良	
4	提 瓶	第15区 図版9	A群	①7.72×4.0 ②16.0	口部内面は口の縁から口まで、外側は口までナズ。内面は不安定なナズで口部を除く。砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
5	瓦 甌	第15区 図版9	A群墓道	①11.31×②9.5	胴部に1本の灰線。内面は不安定なナズ。他はナズを施す。両縁部で胴部上へは灰の中心を施す。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
6	杯 蓋	第15区 図版9	B-1号 墓道	①11.80×5.1	外口部外縁は1部へう張り。他はナズを施す。外口部から口縁部にかけて1部は灰線が施される。砂粒を多く含む。	灰黄色	良	口部は灰線が施される。
7	平 瓶	第15区 図版9	B-1号 墓道	①6.2 ②12.6(器底)	口部はナズ。外口部外縁はナズ。外口部へう張り。内面はナズを施す。砂粒を多く含む。	灰 色	良	
8	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズ。内面は不安定なナズで口部を除く。小砂粒を多く含む。	灰黄色	やや不良	B-2号は、口部はナズ。
9	杯 身	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	やや不良	B-2号は、口部はナズ。
10	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
11	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
12	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
13	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
14	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
15	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
16	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
17	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
18	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
19	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
20	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
21	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
22	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
23	杯 蓋	第15区 図版9	B-2号 墓道	①11.80×5.6	外口部外縁はへう張り。他はナズを施す。器底は薄灰陶質。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	
24	杯 身	第17区 図版10	B-2号 墓道	①10.80×4.8	器底は薄灰陶質。口部外縁はへう張り。内面は不安定なナズで口部を除く。小砂粒を多く含む。	灰黄色	良	

[illegible]

番号	群 種	発掘層 (土層)	出土地点	寸 法cm	調整及び特徴	色 調	焼 成	備 考
59	杯 蓋	第13段	土層 西端部	①7.0②23.3 ③6.9④0.4	つまみ周縁はへう折れ。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	焼成色	良	
60	杯 身	第13段	土層 西端部	①8.4②8.7 ③0.7	収けしきり大で、内面に焼けよく見れる。底部外縁は緩なへう折れ。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	3段にわけて 焼成色	良	内面に多くの 黒い斑点。
61	杯 身	第13段	土層 西端部	①9.5②8.6	底部外縁は緩なへう折れ。底はナデを施す。砂粒を多く含む。	焼成色	良	内面に黒い 斑点。
62	高 杯	第13段	土層 西端部	①0.2	杯口内面及び外縁の1/3は暗褐色の自然釉を被る。また外縁は若くは付いている。内外面ともナデを施す。砂粒を多く含む。	3段にわけて 焼成色	良	
63	杯 身	第13段	土層 西端部	①8.0②0.3	底部外縁は緩なへう折れ。底はナデを施す。収けしきり大。小砂粒を多く含む。	灰 色	良	内面に多くの 黒い斑点。
64	杯 身	第13段	土層 西端部	①8.5 ②3.8③4.0	底部外縁は緩なへう折れ。底はナデ。小砂粒を多く含む。焼けしきり大。	灰 色	良	内面に多くの 黒い斑点。
65	杯 身	第13段	土層 西端部	①10.6②8.1	底部外縁はナデでやや平直となる。底はナデを施す。砂粒を多く含む。	3段にわけて 焼成色	やや 不良	全焼を要す。
66	浅 鉢	第13段	土層 西端部	①13.4②4.9	器壁は磨滅している。口縁部と外縁との間はやや緩なへう折れ。底部外縁は2/3が磨滅に黄色。	磨滅色	良	土層部
67	浅 鉢	第13段	土層 西端部	①13.1(磨滅) ②4.5(磨滅)	器壁は磨滅が外縁の1部にへう折れが現れる。	磨滅色	良	土層部
68	平 皿	第13段	土層 西端部	①6.8②10.0 ③1.6	小砂粒が器壁に付着している。口縁部はへう折れ。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	灰 色	良	
69	平 皿	第13段	土層 西端部	①13.1②8.1 ③1.1	器壁は磨滅している。口縁部はへう折れ。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	3段にわけて 焼成色	良	器壁は磨滅し て付着している。
70	平 皿	第13段	土層 西端部	②1.7	口縁部は欠く。器壁は磨滅している。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	灰 色	良	
71	高 杯	第13段	土層 西端部	①14.7②9.1 ③8.9	器壁は磨滅し、底部は磨滅している。口縁部はへう折れ。底はナデを施す。小砂粒を多く含む。	灰 色	良	

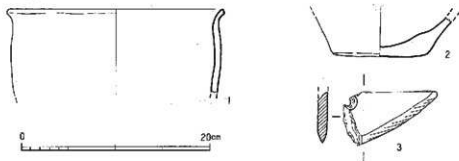
(4) 弥生土器・石器 (第15図)

墓道より弥生土器片数点と石磨丁片1点が出土した。弥生時代前期末頃のものと思われる。

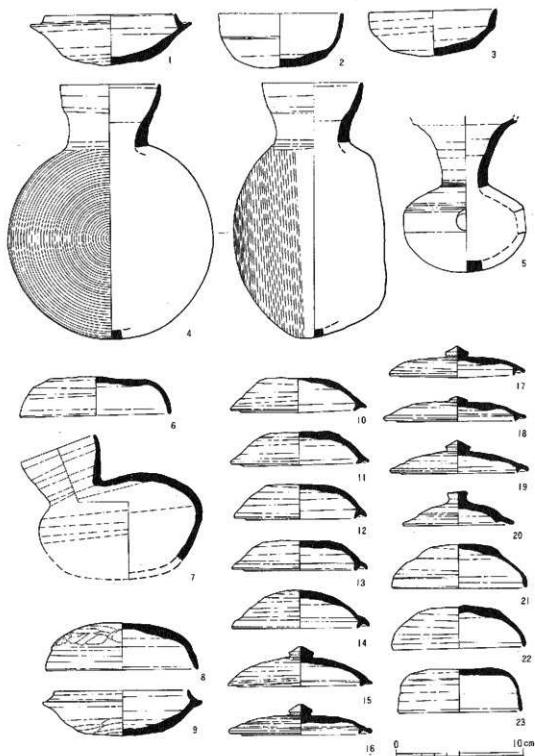
1は、B-2号墓道覆土出土の甕の口縁片で、復原口径23.0cmを測る。磨滅気味の口縁部は短かく屈曲する。胴部の張り力は小さい。器面は磨滅しており、外面に一部ハケが見られる。胎土に砂粒、小砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄橙色、外面は褐色で一部黒褐色をなす。

2は、C群墓道覆土出土の甕の底部で、底径10.2cmを測る。器面は磨滅著しい。外面はナデで底部付近には指圧痕が見られる。焼成は良く、黄橙色を呈しており、外面は一部黒化している。

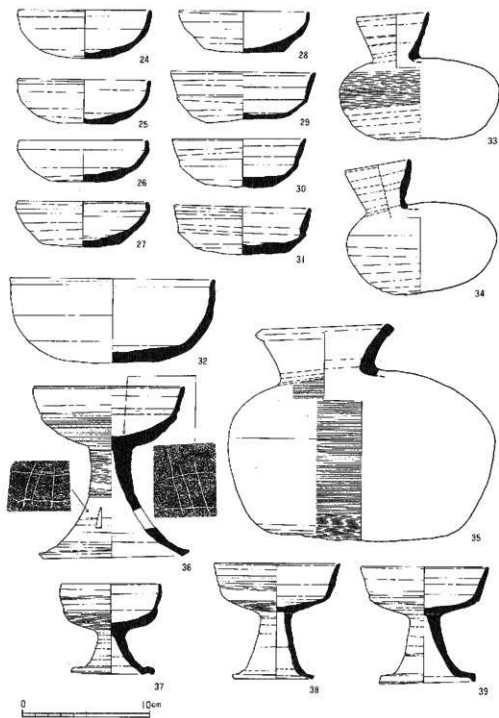
3は、C群墓道覆土出土の石磨丁片で、背部を欠く。現存長50mm、厚さ5mmを測る。刃部は両面より研ぎ出されており、明瞭な稜をなす。刃部には斜方向に明瞭な擦痕を有する。孔は両面穿孔で孔径3mm程である。器面は良く研磨されている。石材は青白色の硬質砂岩である。



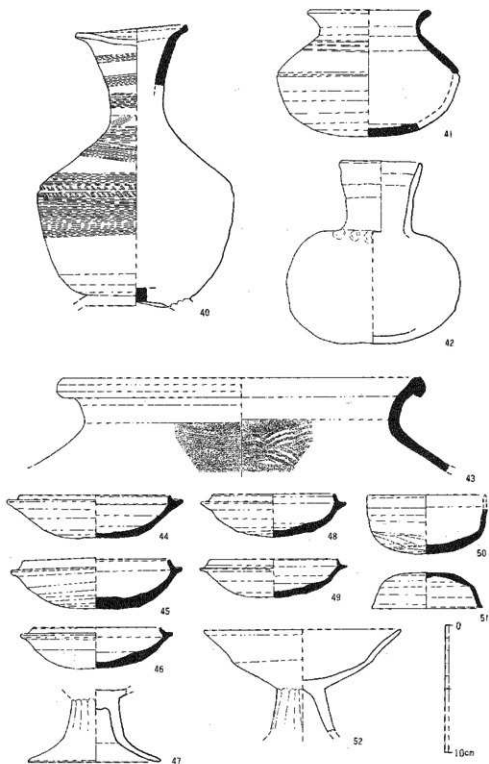
第15図 弥生土器 (1/4)、石器 (1/2) 実測図



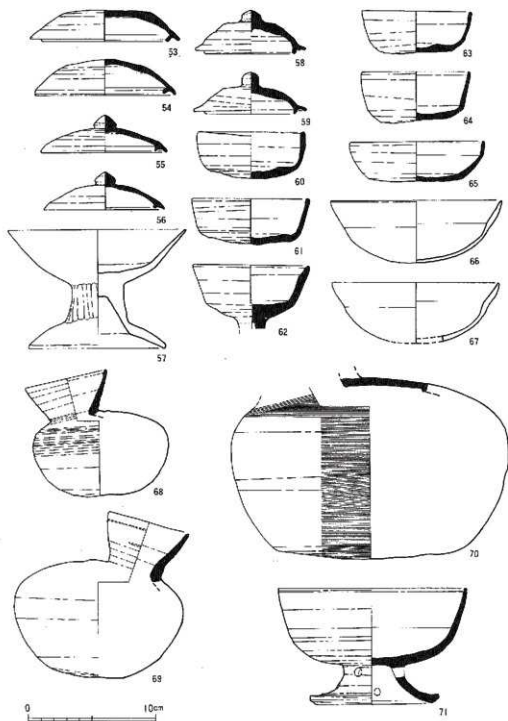
第16图 土器実測图 | (1/3)



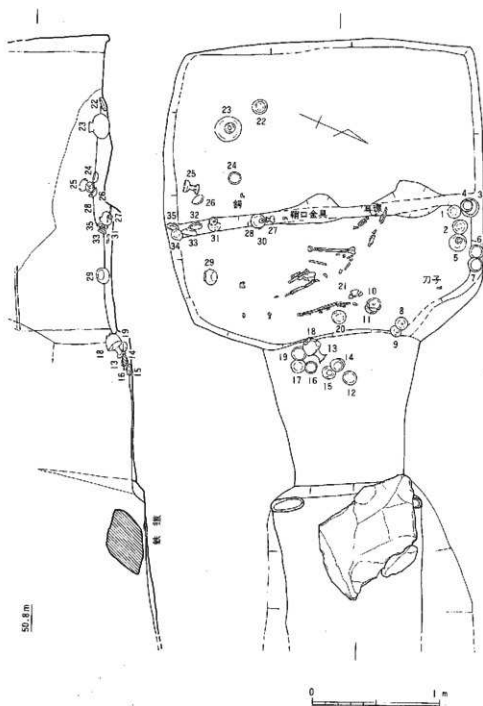
第17图 土器実測図 2 (1/3)



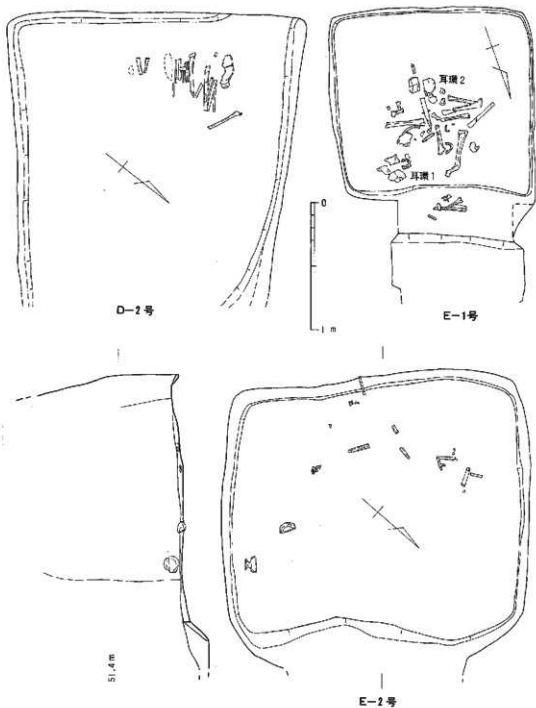
第18图 土器 实测图 3 (1/3)



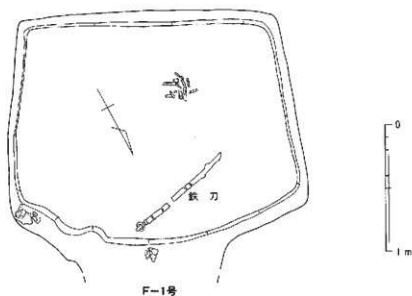
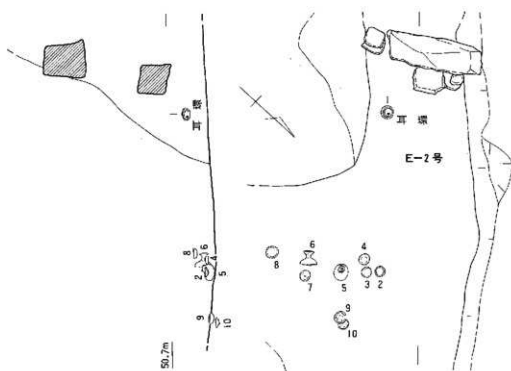
第19圖 土器実測図 4 (1/3)



第20図 B-2号遺物・人骨出土状態 (1/30)



第21図 D-2号, E-1, 2号遺物・人骨出土状態 (1/30)



第22図 E群前庭部及びF-1号遺物・人骨出土状態 (1/30)

Ⅳ. 出土人骨について

坂田 邦 洋

はじめに

福岡県田川市大字伊田1969番地の1所在の轟尾横穴墓群から古墳時代後期(六世紀末～七世紀前半)の人骨が13体発掘されたので以下、報告する。轟尾横穴墓群の7基の横穴墓から出土した13体の人骨は、成人男性骨3体、成人女性骨5体、成年骨1体、小児骨3体、それに性別、年齢不明骨1体であった(第3表)。

横穴墓番号	人骨番号	性 別	年 齢	推定身長値
A-4		女 性	熟 年	
B-2	1号人骨	—	成 年	
	2号人骨	女 性	壮 年	156.09cm
C-1		不 明	小 明	
D-2	1号人骨	女 性	壮 年	
	2号人骨	女 性	熟 年	
E-1	1号人骨	女 性	熟 年	144.80cm
	2号人骨	—	小 児	
	3号人骨	男 性	熟 年	164.03cm
	4号人骨	—	小 児	
E-2	1号人骨	—	小 児	
	2号人骨	男 性	成 人	
F-1		男 性	熟 年	

第 3 表 人 骨 一 覧 表

埋 葬 (第20～23図)

A-4号：熟年女性骨が1個体分であったが、いずれの骨も断片的なものであるため埋葬姿勢はわからなかった。

B-2号：玄室の中央に溝があって床が2床に分かれている。奥の屍床からは頭を左にした成年が、手前の屍床からは頭を左にした壮年女性が屈葬で埋葬されていた。この女性は膝を立

てていたらしく、下肢が左右に開いている。

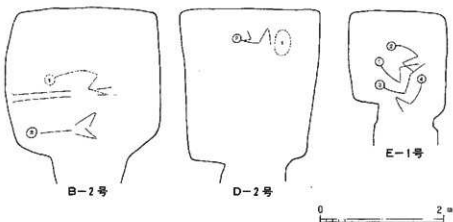
C-1号：右胫骨（片）のみ出土した。性別、年齢および埋葬姿勢についてはわからない。

D-2号：2体の人骨が出土した。1号人骨（壮年、女性）は集骨されていた。2号人骨が追葬される時、先に埋葬されていた1号人骨をその足もとに集骨したらしい。2号人骨（熟年、女性）は奥壁に接するように屈葬で埋葬されていた。

E-1号：ここからは4体出土した。玄室床面が羨門に向かってやや傾斜しているため人骨に多少の移動（流れ）はあるものの、埋葬姿勢および埋葬順位を確認できた。埋葬にあたっては1号人骨のあと2号→3号の順に追葬し、最後に4号人骨を追葬している。いずれも屈葬であった。

E-2号：小児骨と成人男性骨が奥壁近くに散乱していた。いずれも埋葬姿勢はわからない。

F-1号：人骨は羨門近くと、玄室の左端、それに玄室の中央の3つのブロックに分かれていた。いずれも同一個体で、熟年男性骨と推定される。埋葬姿勢はわからない。



第23図 埋葬姿勢（略図）

人骨所見（第23～25図，図版12，第4～8表）

A-4号：頭蓋骨、大腿骨、胫骨が1個体分出土した。頭蓋骨（頭頂骨）は縫合の内板が閉鎖しているので年齢は熟年と推定される。また、大腿骨および胫骨は男性にしてはやや細いので、この人骨は女性と推定される。胫骨はヒラメ筋線の発達がよく、しかも偏平性（中央断面示数68.97）が認められる。（第8表）。

B-2号(1号人骨)：鎖骨、腕骨、大腿骨、胫骨が出土した。大腿骨の骨体周(68mm)は小児のそれより大きく、宮崎県大萩37-1(男性、18~19歳)の72mmに近いので、この人骨の年齢は成年後半と推定される(第7表)。

B-2号(2号人骨)：前頭部のふくらみ、歯および四肢骨の細さなどから女性と推定される。また頭蓋の縫合は開離しているので年齢は壮年と推定される。下顎骨から遊離した14個の歯の咬耗度はBrocaの1~2度である。左大腿骨はほぼ完全に保存されていた(第7表)。ピアソンの式を用いて左大腿骨から求めた身長推定値は156.09cmで、女性にしては高身長である。この人骨は北豊前・筑前タイプとされる高顔・高身長 of 古墳人タイプに属するものと思われる。ただしこの女性の大腿骨は、骨体上部は偏平にならないものの、粗線や骨体両側面の後方への発達良好で柱状形成がみられる。胫骨は中央断面示数が88.46であり、偏平性は認められない(第8表)。

D-2号(1号人骨)：頭蓋骨のかなりの部分と上腕骨、大腿骨、胫骨が出土した。後頭隆起および乳様突起が小さいので女性と推定される。また縫合は内外ともに開離しているので年齢は壮年と推定される。大腿骨(第7表)は粗線の発達が良くない。各部の径は九州地方の同時代のものや現代人よりもやや大きいものの、骨体中央断面示数および上骨体断面示数は同地方のものに近い。

D-2号(2号人骨)：頭蓋骨、上腕骨、大腿骨、胫骨、腓骨が出土した。乳様突起が小さくて骨体が細いので女性と推定される。縫合が閉鎖しているので年齢は熟年と推定される。

E-1号(1号人骨)：頭骨、下顎骨、上腕骨、尺骨、寛骨、大腿骨、胫骨が出土した。左右の乳様突起および歯が小さく、大坐骨切痕が大きいので女性と推定される。縫合は閉鎖し、歯の咬耗度はBrocaの2~3度であるから年齢は熟年と推定される。下顎骨は切痕がのこり、他の歯は歯槽が閉鎖しており、しかも老人性の骨吸収が認められる。上腕骨の三角筋粗面の発達は良いものの、骨体は偏平にならない(第6表)。大腿骨は粗線の発達が良くて柱状形成をなす。骨体上部の上骨体断面示数が69.70(右)と72.73(左)であり、偏平性が強い。右大腿骨の取り上げに先立つ計測によれば、その最大長は37cmであった。ピアソンの式を用いると推定身長値は144.80cmになる。これは南九州古墳人(146.8cm)よりやや低くなっており低身である。このことから森尾横穴墓群には高身(B-2号の156.09cm)と低身(144.80cm)の、いずれの女性もいた。

E-1号(2号人骨)：頭蓋骨、鎖骨、大腿骨、胫骨が出土した。頭蓋骨はやや大きな破片であった。上顎の左右の第2大臼歯は萌出直後であり、第3大臼歯は未萌出である。したがって、この人骨の年齢は12歳前後と推定される小児である。大腿骨の計測値は第7表のとおりである。なお、この人骨は左側に外耳道骨腫が認められる。

E-1号(3号人骨)：保存が最も良かった。頭骨の大きな破片と下顎骨、大腿骨、胫骨が出土した。乳様突起および歯が大きく、外後頭隆起が突出しているので男性と推定される。頭蓋

第4表 備 式

$\begin{array}{cccccccc cc ccc} \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & I_2 & I_1 & I_1 & I_2 & C & P_1 & \diagup & M_1 & M_2 & \diagup \\ x & x & x & x & x & x & x & x & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & x & x & x & x & x \end{array}$	E-1 1号人骨
$\begin{array}{cccccccc cc ccc} (M_3) & M_3 & M_3 & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & C & \bigcirc & \bigcirc & M_1 & M_2 & (M_3) \end{array}$	E-1 2号人骨
$\begin{array}{cccccccc cc ccc} \bigcirc & \bigcirc & M_1 & P_2 & P_1 & C & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & C & P_1 & P_2 & M_1 & M_2 & \diagup \\ \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & \diagup & C & \bigcirc & \bigcirc & x & \bigcirc & \bigcirc \end{array}$	E-1 3号人骨
$\begin{array}{cccccccc cc ccc} M_2 & M_2 & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & M_1 & M_2 \end{array}$	E-1 4号人骨

$\bigcirc$: 齿槽開放
 x : 齿槽閉鎖
 $\diagup$: 不明(破損)

第5表 下顎骨計測値

	E-1 1号(女性)	E-1 4号(小児)
67 前下顎幅	43	48
69 オトガイ高	30	25
69(1) 下顎体高(右)	--	23
(左)	22	24

第6表 上腕骨計測値

		E-1	
		1号(女性)	
		(右)	(左)
5	中央最大径	23	22
6	中央最小径	18	18
7	骨体最小径	68	67
7a	中央洞	71	71
6/5	骨体断面示数	78.26	81.82

第7表 大腿骨計測値

		男 性			女 性				小 兒			
		E-1		E-2	B-2		D-2	E-1		E-1	E-1	B-2
		3号(左)	2号(右)	(左)	2号(左)	1号(左)		1号(右)	(左)	2号(左)	4号(左)	1号(左)
1	最大长	440			428							
2	自然位长	434			423							
6	骨体中央部欠状径	28	28	—	28	28	28	25	20	23	21	
7	骨体中央部横径	26	32	—	25	27	26	25	21	25	20	
8	骨体中央长	87	86		85	83	86	82	68	76	68	
9	骨体上横径	31	34	34	29	33	33	33	25	30		
10	骨体上欠状径	25	27	28	24	25	23	24	19	22		
8/2	长厚示数	20.05			20.09							
6/7	骨体中央断面示数	107.69	87.50	—	112.00	108.70	107.69	100.00	95.24	92.00	1.05	
10/9	上骨体断面示数	80.65	79.41	82.35	82.76	75.76	69.70	72.73	76.00	73.33		

第8表 胫骨計測値

		男 性			女 性			小兒
		E-1		E-2	F-1	A-4	B-2	E-1
		3号(右)	(左)	2号(左)	(右)	2号(右)	4号(左)	
8	中央最大径	29	29	32	35	29	26	24
8 a	栄養孔位最大径	—	33					
9	中央横径	23	23	22	27	20	23	16
9 a	栄養孔位横径	—	26					
10	骨体周	88	87	86	89	78	78	67
10 a	栄養孔位周	—	97					
10 b	最小周	80	77					
9/8	中央断面示数	79.31	79.31	68.75	77.14	68.97	88.46	66.67
8a/8a	栄養孔位断面示数	—	78.79					

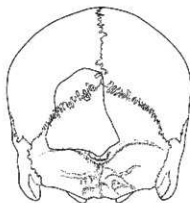
の縫合は閉鎖しており、歯の咬耗度はBrocaの2～3度であることから、年齢は熟年と推定される。ピアソンの式による身長推定値は164.03cmになる。これは北豊前古墳人(164.1cm)と同一身長である。大腿骨の骨体上部示数(80.65)は大きい方に属している。また骨体中央断面示数は107.69と高く、柱状形成をなす。胫骨はヒラメ筋線がよく発達しているものの、偏平性は認められない。

E-1号(4号人骨)：前頭骨、下顎骨、上腕骨、大腿骨、胫骨が出土した。中でも下顎骨は比較的に保存が良かった(第5表)。下顎骨の第2大臼歯は萌出直後のため咬耗がほとんどみられない。したがってこの人骨の年齢は12歳前後の小児と推定される。大腿骨の各数値はE-1号の2号人骨に比べてやや大きい。中でも上骨体断面示数は73.33であり、偏平性が認められる。胫骨の骨体も偏平になっている(第8表)。

E-2号(1号人骨)：歯、大腿骨、胫骨が出土した。歯は乳歯のほか第1大臼歯に咬耗が少し認められるから、年齢は6～7歳と推定される。四肢骨は計測できなかった。

E-2号(2号人骨)：下顎骨、寛骨、大腿骨、胫骨、腓骨が出土した。寛骨の大坐骨切痕が鋭角になっており、四肢骨が比較的大きいので男性と推定される。年齢は成人に違いないが、保存が良くないので詳細な判定はできない。大腿骨は粗線の発達が良いものの横径が大きいため示数値が高くなっている。大腿骨体上部は著しく偏平(87.50)である(第7表)。胫骨は偏平性が認められ、南九州人に近い値であるが、縄文人よりは弱くなっている(第8表)。

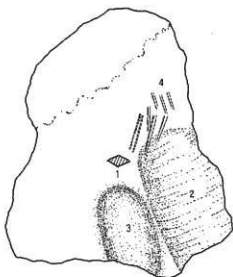
F-1号：頭蓋骨、寛骨、大腿骨、胫骨が出土した。寛骨の大坐骨切痕が鋭角になることから、この人骨は男性と推定される。また頭蓋の縫合が閉鎖しているので年齢は熟年と推定される。胫骨(第8表)は横断面形が菱形をなすものの、その示数は77.14と高い値を示している。



第24図 損傷の見られる骨の部位(後頭部)(1/3)

骨損傷について報告しておきたい(第24・25図、図版12)。図版12及び第24、25図は後頭骨の左骨で、外後頭隆起より上半部にあたる。図版12-2(外側面)の上部に左下方向の沈線がみられるが、これは人字縫合(閉鎖)にあたる(第24図)。この骨には4ヶ所に異常が認められる(第25図No1～4)。

No1損傷：後下方から上方に向けて穿孔が認められる。孔は左右6mm、上下4mmの平面菱形をしている。外側面は菱形に穿孔しており、僅かに仮骨形成がみられる。また内側面(図版12-1)は仮骨形成が進んでおり、孔は隅丸方形(4mm



第25図 骨 損 傷 (1/1)

×2mm) になっている。刺突の際、頭蓋内部に上下に5mmと3mmの亀裂が入っているが、そこは治癒している。この穿孔は、断面が菱形をした小型の武器が突き刺さってできた傷と考えられる。たとえば尖根鐵のような金属製武器が推定される。なお、刺突孔に治癒機転が認められることは、骨折後、一定期間生存していたことを物語っている。

No 2 損傷：穿孔(No 1)付近から下方に向かって幅2cm(以上)、長さ4cm(以上)、厚さ2.0mmにわたって、平板状に異常に薄くなっている。その部分の内板は正常の弯曲を示しているが、外板は陥凹が著しい。これは人工的長期の圧迫(変頭術?)に基づくものではないかと考えられるが、あるいは特異な疾患ないし遺伝的要因に基づくものかもしれない。部位は異なっているが、小牧西牟田6-1号横穴人骨(福岡県鞍手町)の場合、左右の頭頂骨に対称的に鶏卵大の骨壁の異常に薄い部分が報告されている。

No 3 骨腫：穿孔の下部で、No 2 陥凹の外側付近に、上下25mm、左右20mm程の骨腫がみられる。この骨腫はNo 2 の圧迫に起因するものかどうかかわからないが、境界が明瞭であり、表面が平滑だから、良性の骨腫と推定される。国府遺跡(大阪)出土の縄文人骨にも同様の骨腫が報告されている。

No 4 損傷：No 1 穿孔(外側)の右上に数本の新しい沈線がみられる。これは後になって齧齒類による咬痕と思われる。

ま と め

轟尾横穴墓群出土の人骨の特徴を次のように要約することができる。

1. 埋葬姿勢は屈葬と推定されるものばかりで、伸展葬は認められなかった。人骨は玄室の奥壁に屈葬で押し込められたような格好のもの(D-2号)や、追葬で骨が重なり合っていた(E-1号)。これらの遺体の埋葬にあたっては、遺体を棺に入れずに布で包んだ程度のものを玄室内に埋入していたのではないと思われる。

2. 轟尾横穴墓群出土の人骨の身長推定値は、男性は164.03cm、女性156.09cmと144.80cmであった。男性は北豊前あるいは筑前の古墳人と同じ高身長であった。女性は高身長のもので低身長のものがみられた。高身長の女性は男性と共に北豊前・筑前タイプの古墳人の系統に入るものと思われる。低身長の女性は豊後や南九州古墳人に近い。

3. 轟尾横穴墓群出土の人骨の形質には、北豊前・筑前タイプとその周辺(豊後、南九州)タイプがみられる。それぞれのタイプの特徴(形質)だけを持った個体もあれば、北豊前・筑前タイプ(高身長)でありながら豊後や南九州的な形質を持った個体もみられた。

4. F-1号人骨は、後頭骨の左側上半部に、後下方から上方に向けて鐵(鉄・銅)と推定される武器による刺傷がみられた。治癒機転が認められるので受傷後、ある期間生存していたようである。穿孔の近くに人工的長期の圧迫によると思われる陥凹がみられる。また母指人の骨腫も認められる。

小稿を終えるにあたり、調査の機会を与えていただいた田川市教育委員会並びに市立石炭資料館の各位に、心から謝意を表します。

参 考 文 献

- 内藤芳繁・1985「Ⅱ. 南九州および豊後」『季刊人類学』16巻3号、34～37ページ。
永井昌文・1986「Ⅲ. 北部九州・山口地方」『季刊人類学』16巻5号、47～57ページ。
永井昌文・1981「Ⅳ. 出土人骨について」『小牧西牟田横穴群』新「町文化財調査報告書第1集」。

おわりに

横穴墓について

今回、16基を発掘した。横穴墓は、丘陵北側斜面をカットし、そこから切り込まれていた。同一カット面に造られたA～D群は床面レベルが異なっており、また個々に関しても羨道、墓道の長さ、方向が異なっていた。限られた墓域を十分に活用するための工夫であろうか。

玄室平面形は方形が主で、立面形はドーム、アーチが主である。B-2号は唯一家形を呈するもので、造りは複雑、丁寧で、屍床は溝により二分されていた。

E-1号は唯一、複室構造を呈するもので、他より小形だが、造りは極めて丁寧、複雑である。田川地方では経塚横穴墓群、伊山狐塚横穴墓群横穴墓群の中で若干知られているにすぎない。

E-2号羨門前の両側上端は平坦化しており、ここに、試掘中検出した大石を架構していたのであろうか。架石の例としては狐ヶ迫横穴墓群、経塚横穴墓群の中でも見られ、関連性が考えられる。

小型横穴は墓道に付設されていた。土器埋納施設とされている例もあるが、当横穴からは出土遺物は無く、現状ではいかにして活用されていたのかは不明である。

閉塞は現状より枕状石、板石及び木板を組み合わせて行なったようである。

築造年代は土器より六世紀末頃で、七世紀前半まで追葬が行なわれていた。

なお、丘陵頂部には円墳が1基構築されていた。このように、横穴墓をとりまく丘陵上に古墳が存在する例はいくつか知られており、横穴墓と古墳との関連性追求は今後の課題である。

土器について

盗掘及び墓道調査不十分のため比較的少量であった。須恵器が大部分で、小田富士雄氏編年によるⅣ期、Ⅴ期に属する。ヘラ記号をもつものは高杯1点のみであった。

遺体埋葬について

7基より計13体の人骨が検出された。追葬が行なわれていたことは明らかで、E-1号の様に4体埋葬したものもあった。埋葬姿勢は屈葬と推定されている。形質的には、北豊前、筑前タイプと豊後、南九州タイプとがあることが判った。

参考文献

注1 「大行事横穴群」『大任町文化財調査報告書』第3集 大任町教育委員会 1979。

注2 「夏吉古墳群・経塚横穴群・伊山狐塚横穴群」『田川市文化財調査報告書』第2集 田川市教育委員会 1983。

注3 「狐ヶ迫横穴群」『田川市文化財調査報告書』第1集 田川市教育委員会 1981。

注4 註3に同じ。

圖 版



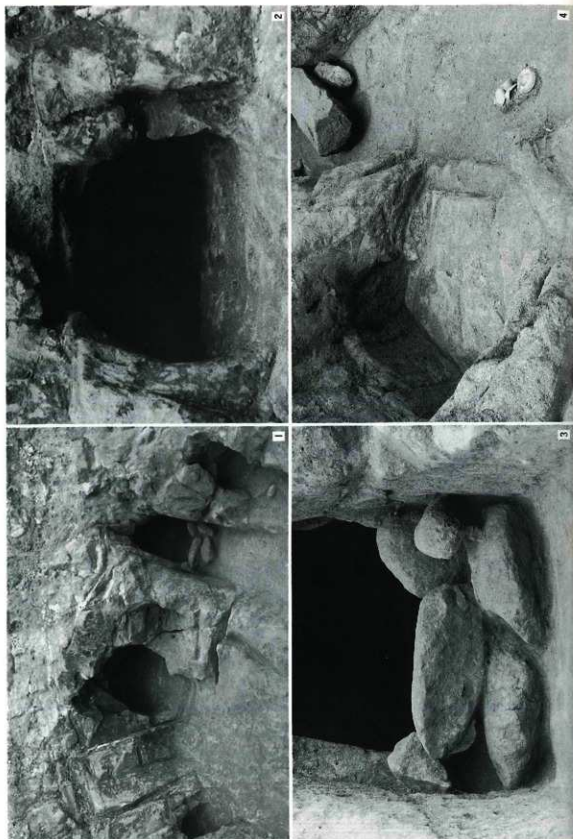
1. 横穴墓群遠景(鎮西小学校より)



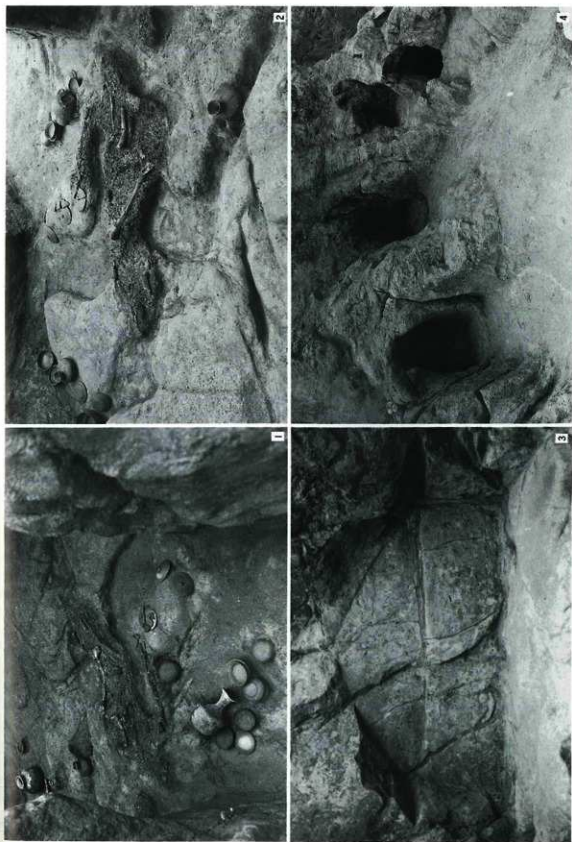
2. 横穴墓群近景(北西より)



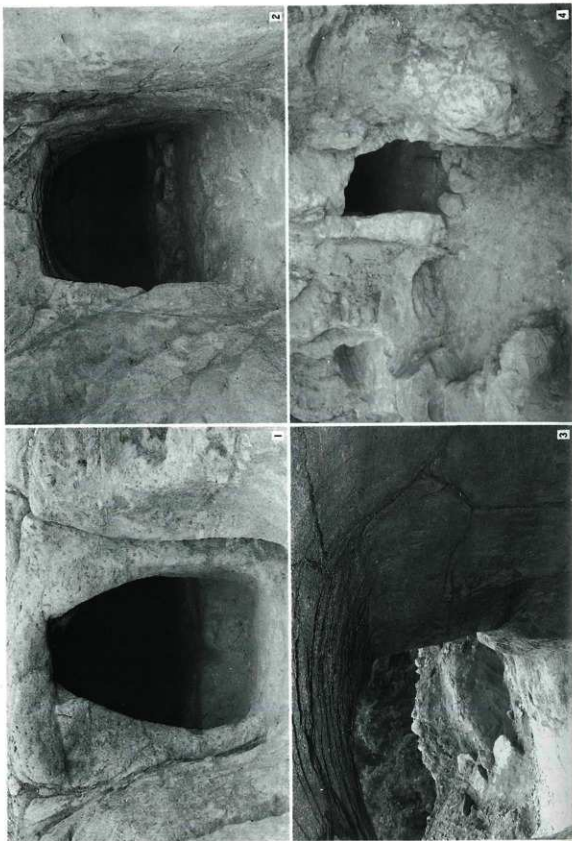
3. 横穴墓群全景(気球より)



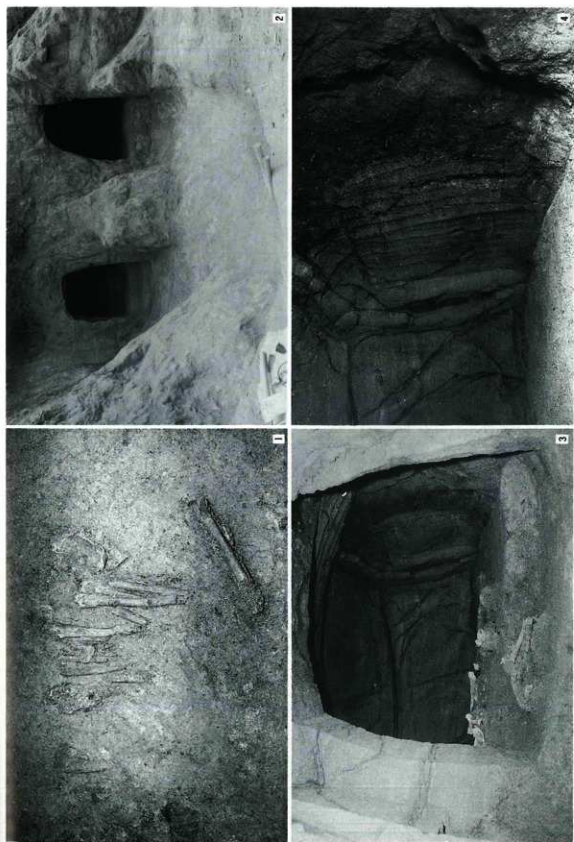
1. A群全葬 2. A-1号 3. A-4号明墓穴窟 4. B-1号



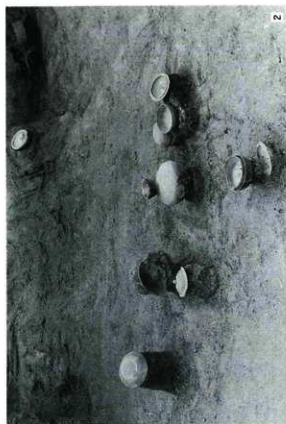
1, 2. B-2号遗址·人骨出土状态 3. B-2号遗址 4. C群全貌



1. C-1号 2. C-2号 3. C-2号工兵版 4. D新全景



1. D-2号人骨出土状貌 2. E群全景 3. E-1号人骨出土状貌 4. E-1号工具痕



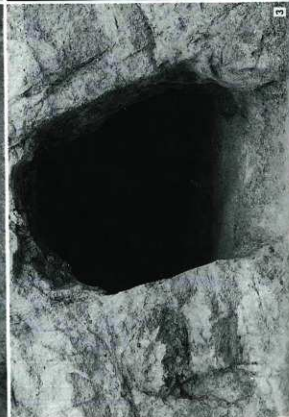
2



4

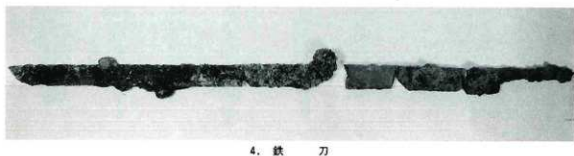
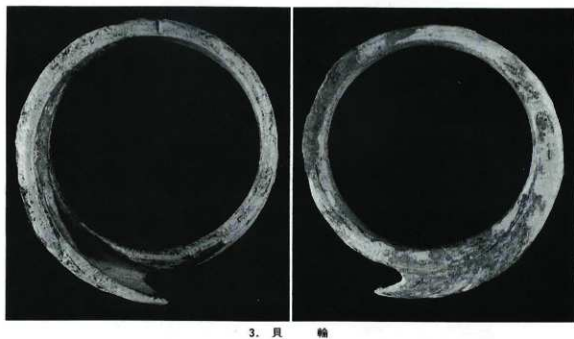
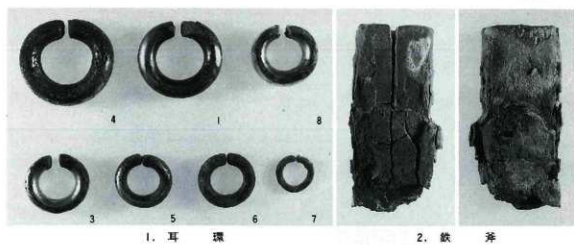


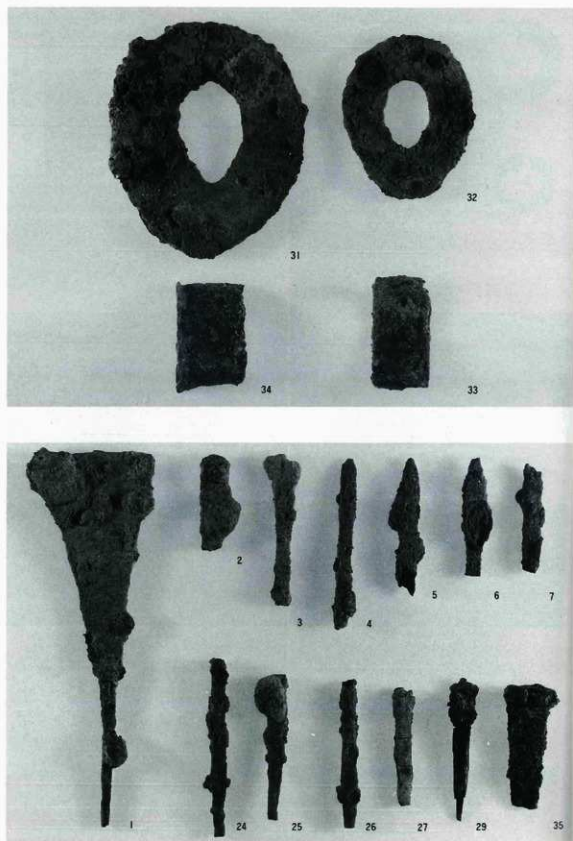
3



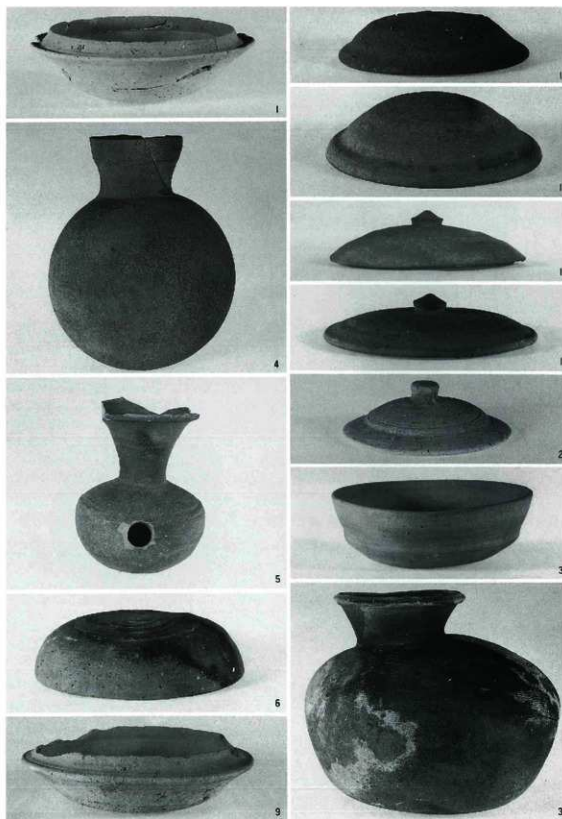
1

1. E-2号人骨出土状态 2. E群前庭部遗物出土状态 3. F-1号 4. F-1号裁刀出土状态





銅・稍金具・鉄鏃・刀子





33



39



36



41



37



42



40



45



46



48



60



51



66



53



68



54



55



69



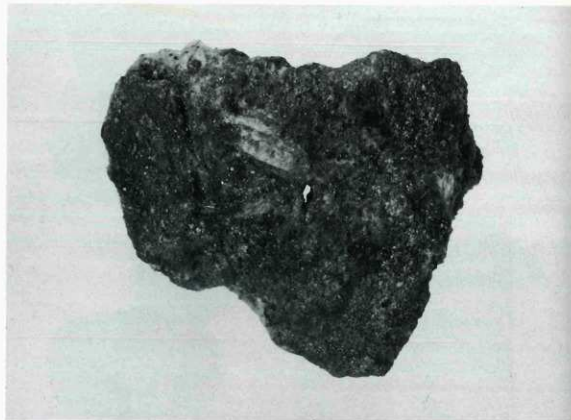
57



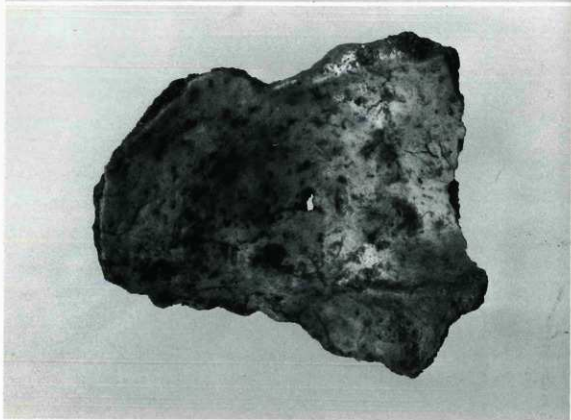
71



58



2. 損傷のある骨 (外側)



1. 損傷のある骨 (内側)

轟尾横穴墓群

田川市文化財調査報告書
第 5 集

平成元年 3 月 31 日

発 行 田 川 市 教 育 委 員 会
田 川 市 中 央 町 1 番 1 号
印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社 印 刷 部
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31